



南国土佐訪問

桑野 巍

昨秋のこと。JR大阪駅北側から高知行の高速バスに乗った。バスは途中2か所で10分間のトイレ休憩があったが片道5時間かかった。鳴門で海に別れを告げ、山また山の中を走った。高知県に入るとトンネルに入ったり出たりで車窓の景色は楽しめなかった。土曜日だからか若い女性客の仲良し組にも出会った。彼女たちは菓子を回し、思い思いに携帯電話とにらめっこしてバスの旅を楽しんでいた。

車中で頭に浮かんだのは高速道路の便利さとその昔の土佐の偉人たちのこと。幕末の風雲児と言われる坂本竜馬をはじめとする志士たちは高い志と情熱を持ち続けてあの山谷を歩いて越えたのだろうか。150年後の便利文明社会を予測しただろうか脳内を駆け巡っていたころ、車外では小雨が霧雨に変わった。

JR高知駅に定刻通り到着。会社時代の友人が出迎えてくれ安堵した。彼は定年後故郷高知に引き揚げ、母親と同居し親孝行している。彼のマイカーで桂浜の坂本竜馬記念館に向かった。県立の館は壁面がガラス張りで近代的、巨大なミラーは季節を映す鏡らしい。館内では竜馬の声は聞けないが、年表、書簡など貴重な資料が展示されている。館の屋上の南詰め^{ミナト}に立つと、竜馬が見た太平洋が広がり彼の大志が聞こえてきそうだった。少し下がった桂浜公園には高さ13メートルの竜馬像が建ち記念撮影を試みた。

目と心をせんとくしたせい^{せい}か翌朝の目覚めは早かった。早朝ホテルを飛び出し徒歩ではりまや橋に向かった。ごみ掃除をしている地元ボランティアの人たちに出会い話かけた。「これがはりまや橋?」と聞くと、彼は「高知では名前ほど人気がない所で…」と言う。「ここより土佐の日曜市の方が人気がある」と教えてくれた。

折しもその日は日曜日、すぐ市会場^{いち}に向かった。高知城の追手門から真^まっ直ぐ東へ延びる追手筋が日

曜市の会場だ。楠木とフェニックスが揺れる南国情緒満点のメインストリート、日曜市はその片側2車線を使って開かれていた。思い思いのテントを張っているが、店の行列の距離は約1.3キロメートル。全国にさまざまな街路市はあるが毎週日曜日に終日開かれる市は珍しいし、その規模も大きい。市が誕生したのは江戸期の元禄3年(1690年)というから300年以上も続いているという。伝統ある庶民向きの市には緑の葉先にみずみずしい朝露が残っている野菜、そして地元産の果物、卵、作りたての田舎ずし、漬け物、まんじゅう、海産物、切り花や盆栽、陶器類、たこ焼などが店先に並んでいた。宅配便を請負う郵便局もちゃっかり出店していたのも目についた。途中には休憩所もありお年寄りにとっても楽しい集会の場だ。高知市産業政策課が管理運営しているので安全市ともいえる。

地元民が生産し、出店し、消費するという完全地産地消市は賑やかだった。高知市民は幸せそうで「いつまでも日曜市が続いてほしい」と願った。ところが高知には大きな心配もあるという。それは南海、東南海大地震と津波だ。東日本大災害の例があるが、高知市の市街地は標高が極めて低いからだろう。とくに土佐湾から自然の暴れものが侵入してくる危険を感じているようだ。地震や大津波が起こらないに越したことはないが、素人から見ても何らかの災害防止策が必要だろうと余計な心配が頭に浮かんだ。

今回の一人旅は旧友に会うことと知見を広めることだったが、つい我欲を押えることが出来ず、自身の行動力と元気を試すことになってしまった。高知が輩出した数多くの偉人たちには会えなかったが楽しい旅だった。自分的にはこれで足を踏み入れない都道府県は大分県だけになった。旅こそ新発見のチャンス、を忘れず次は大分を訪ねてみたい。

(自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長)